On Neurosis Literature (2) ——Heartless Woman and the "Bestial" in Rachilde's *Animale*

Kensuke KUMAGAI

This paper focuses on the question of the representation of the "neurotic" in *L'Animale* (*Animal Woman*) (1897), a novel written by the French female Decadent author Rachilde (1860–1953), whose writings provoked scandals because of her introduction of sexual themes in the Fin du siècle's literature; recently, they have been read, notably from a gender studies perspective.

Laure, the heroine of this text, narrates her childhood and adolescent experiences with sexual experiments and her seduction of a priest and her father's clerk Lucien. After the revelation of the scandalous suicide of the latter, Laure was thrown out by her parents and escaped to Paris. During her anxious life as a mistress, she met the tomcat "Lion" and lived a love life with "him" regardless of the species difference, until Laure, who had found the ideal "man" (male and human), is savagely attacked by the jealous cat.

For a long time, this text has been analyzed as a depiction of sexual deviance because of its treatment of bestiality or zoophilia, but we especially note the relation of the female gender with "animalities" (nature, instinct, care, violence, and so on), and Rachilde's reinterpretation of this stereotype circulated in the contemporary literature, which was dominated by male authors. Though Rachilde's response looks, more or less, like their misogynic images, she tries to divert the meanings of these stereotypes (e.g., "woman-beasty"), as she transforms the image of "perversion" into that of "subversion" through anti-humanism and pro-animalism (Chap. 1). From this point of view on animality, Laure's character can be read as an ideal heroine for Rachilde: a "heartless" woman claiming "victory against the men (male and human)" in the war between the sexes and the species (Chap. 2). Finally, we see the communication between Laure and the tomcat Lion and the tragic end of their love affair from

the perspective of animal care and savagery. As Lion's partner, Laure metamorphoses into an animal—not only as a creature of desire but also as the bloody "beast" attacked by this tomcat. Therefore, this text of "zoophilia" reveals the gender configuration composed by the neurotic woman and the furious tomcat (Chap. 3).

神経文学論（2）
――ラシルド『動物女』における「心なき」女と獣なるもの

熊　谷　謙　介

高揚させられるのはもはや、魂ではなく神経 nerfs であり、脳内物質である。［……］われわれが病人であることは間違いなく、進歩に病む者なのだ。脳は肥大し、神経は大きく広がる一方で、筋肉は収縮し、弱体化し発熱した筋肉は、人体という機械を支えることができなくなっている。［……］このような血に対する神経の勝利は、われわれの生き方、文学、そしてこの時代全てを決定づけたのだ。

（ゾラ「文学と運動」（1865）『わが憎悪』）[1)]

19 世紀後半、文明化が進む西欧諸国では神経衰弱や神経過敏といった症候が注目されるようになったが、文学者や芸術家たちもまた、神経症に苛まれつつ、デカダンスや「頽廃」という時代認識のなかで、極度に発展した文明社会に生きる新たな人間の姿を描いていった。これは普仏戦争の敗北という深い傷を負いつつも、文明の爛熟期を迎え大衆社会の勃興へと至る世紀転換期のフランスにおいて顕著であり、自然主義文学だけでなく象徴主義文学・デカダンス文学においても確認できることは、先にジャン・ロラン『フォカス氏』の分析で示したところである[2)]。さらに、この

1）　Zola, “La Littérature et la Gymnastique”, *Mes Haines*, G. Charpentier et E. Fasquelle, éditeurs, 1893, pp. 57–58. 以下、刊行地はその記述を省略する。

2）　拙論「神経文学論（1）――ジャン・ロラン『フォカス氏』分析」『人文研究（神奈川大学）』208 号、2023 年、pp. 1–42。

「神経」という問題系は、必ずしも神経症という病理学的な表象や、作家・芸術家の病跡に限られるものではない。悟性的な「精神」による認識ではなく、「神経」を介した感覚やイメージの知覚は、文学作品の中でどのように表象されるのか、またそこから生じる新しい形の主体、外的刺激にたえず揺り動かされるような不安定な主体は、どのような美学を生み出すのか――、こうした問題も、「神経」というパラダイムは含みこむのである。

本稿で取り上げるラシルド『動物女 *L'Animale*』（1893）もまた、フランス 19 世紀末の神経文学として無視することのできない作品である。決して著名ではないラシルド、そしてほぼ忘却され邦訳も存在しないこの作品については、分析をする前に十全な解説が必要であるが、ここではすぐにその冒頭を見てみたい。

> あの夜、若い女は心を落ち着けようと部屋の中をずっと歩き回っていた。まさしく、彼女の神経 nerfs は反発し、何カ月もの間、彼女を苛んでいたこの苦しい不眠の理由を見つけることなど、もはやできなくなっていたのである。まず考えたのは、自ら犯した過ちに対する罰として、ある種の病気に苦しめられ、もうじき死ぬだろうということであった。[3)]

この作品は、南仏の架空の村エステラクで育った少女、ロール・ロルデス Laure Lordès がさまざまな男たちと遭遇しながらも、ある一匹の雄猫と決定的な出会いをし、種を超えた愛の果てに衝撃的な死を迎えるという物語であるが、冒頭からすぐに、神経の高ぶりと女性という主題が展開され

3） Rachilde. *L'Animale*, préface d'Edith Silve, Mercure de France, 1993（Kindle 版）, p. 10. 以下、*A* と省略する。

ている。第２章以降で時間を戻して語られる、奇異な感覚を求めつづけた彼女の少女時代は「過ち faute」とされ、それに対する報いとして神経症はとらえられている。いわば、神経文学におけるジェンダーバイアスが浮かび上がるのであり、女性や神経症に対して「過ち」という名のスティグマが刻印されていると言える。

実際、引用した冒頭に続くのは「そのあとで、彼女は十分に賢いので、このように特別に罰を受けるという考えは退けた」という留保である。このとき主人公ロールはアンリと愛人関係をもっていたが、「なぜ、私の隣に寝ているこの男は、自分を苛んでいる神経症的震えを感じずに、深い寝息を立てて眠り込んでいるのだろうか？」「この不安に苦しむ女は、心の興奮が最高度に高まった瞬間に、彼女と思いを共有するような男などいないと感じた」[4] と、女性が感じる苦悩を共有も理解もできない男性の姿を女性作家ラシルドは描き出す。そうした人間の男性の代わりに現れるのは、屋根の上にさまよい出たロールが目の当たりにする猫たちのダンスであり、別の箇所の記述では、「ロールはアンリに忠実であった。年がら年中幸福だと感じていた。この時までは！　この神経症的な変調をきたす夜 nuit de détraquement nerveux、水晶の屋根の上で、月に照らし出された猫たちが踊る姿を見る前は」[5] と語られるものである。そのなかで下水口にいた雄猫、リオンと名付けられる猫と運命の出会いを遂げるのだ。

それでは、この作品は、ロールという神経症に苛まれる女性が、猫という動物に文字通り「癒される」物語として読むことができるのだろうか。また、『動物女 *L'Animale*』という、女性形として末尾に e をつけたタイ

4）　*Ibid.*, p. 10, 13.

5）　*Ibid.*, 123. またこれらの「神経症」や「変調」という語に関して、19 世紀末からイギリスやフランスで出現した、既成の秩序から逸脱した「新しい女」に対して、「気の触れた女 détraquée」、「神経症者 nervosiaque」、「神経過敏な女 nervosée」というレッテルがジャーナリズムで用いられた。Marc Angenot, «La fin d'un sexe: le discours sur les femmes en 1889», *Romantisme*, 1989, no. 63, p. 13.

トルに示唆されているように[6]、ロールという女性が動物性や本能によって、大都市パリで繰り広げられる殺伐とした人間関係を乗り越えて、自然とのつながりを取り戻す物語なのだろうか。本稿では神経文学の展開を考える上で、女性と動物という二つのファクターを導入したい。まず世紀転換期の文学・芸術において、女性と動物とくに猫が強固に結びつけられてきた背景を示すとともに、ラシルドが主に自伝的作品群で示唆している（ヒト以外の）動物との関わりについて着目する。そこでは女性＝獣というある種のステレオタイプについて、ラシルドがどのように扱い、利用しているのかを明らかとしたい（第１章）。次に『動物女』における主人公ロールの造形について、彼女の内なる動物性の観点から、とりわけ「心 cœur」への懐疑と、「人間＝男 hommes」の一貫した拒否を浮かび上がらせる（第２章）。そして最後に、ロールと雄猫リオンとのコミュニケーションの様態とその行きつく果てを見定めることで、獣姦 bestialité とも動物性愛 zoophilia とも称される両者の関係性を、ケアと暴力という、一見真逆に見える二つの観点から考察する（第３章）。女性作家が描く動物小説を分析するにあたって、動物を「愛する」という（性的）指向の問題と、動物に「なる」という（性）自認の問題をときほぐしながら、この作品の現代的な意義を考えることも課題となるだろう。

序論を終えるにあたって、本稿にかかわる観点を中心に、特異な作家ラシルドについての最近の研究動向を概観したい[7]。ジェンダー論的読解を中心に英語圏での読み直しが進むなかで、フランスにおいても 2022 年に主著『ヴィーナス氏』がガリマール社から再版され[8]、若者向け文化誌

6） このように言語上の性を転換させる技法は、ラシルド Rachilde という筆名にも見られるものであり、16 世紀のスウェーデンの男性貴族の名とされる Rachild に女性を意味する e をつけたと解釈できる。

7） 以下の拙論も参照。「BL 小説の起源？ ――ラシルド『自然を外れた者たち』分析」『人文研究（神奈川大学）』181 号、2013 年、pp. 51–52。

8） *Monsieur Vénus, roman matérialiste*, Gallimard, coll. L'Imaginaire, 2022.

『レ・ザンロキュプティーブル』2022年7・8月号で、新刊ではないのにもかかわらず書評が出るほどであった[9)]。また同年には、ラシルドの前半生に着想を得た、セシル・シャボーによる小説『文士ラシルド』も発表され話題となった[10)]。2023年には論集『ラシルド、あるいは後世の不確定さ――忘却から再生へ』が出版され、女性、美と倫理、受容と批評という3つの観点を軸に多様な論考が発表されており、本稿でもしばしば参照する[11)]。また、博士論文をもとにして、アニタ・スタロン『美学が交差する場所で――ラシルドと小説的作品1880–1913』、ヴィッキー・ゴーティエ『ラシルド、幻想的・怪物的女性作家』（2020）という大部の研究書も出されている状況であり[12)]、ラシルド研究は新しい局面へと展開していると言えるだろう。本稿はジェンダー論的アプローチに属し、英米圏で進んでいるアニマル・スタディーズの導入を意識しながらも、神経文学や同時代の文学環境や思想的言説との関係を重視して、『動物女』を分析していきたい。

1.「女性＝動物」とラシルドの動物観

女性を動物にたとえる修辞法は珍しいものではなく、とりわけ世紀転換期の文学・芸術作品には、女性に対する偏向した表現の一つとしてしばしば見られるものである。セイレーン（人魚）やキマイラ、ストリージュ（鳥の姿をした吸血鬼）など、鳥や蛇など複数の動物が組み合わされた想

9）*Les Inrockuptibles*, No. 12 de juillet-août 2022, p. 185.
10）Cécile Chabaud, *Rachilde, homme de lettres*, Écritures, 2022.
11）Thierry Poyet（dir.）, *Rachilde ou les aléas de la postérité : De l'oubli au renouveau*, Classique Garnier, 2023.
12）Vicky Gauthier, *Rachilde. Écrivaine fantastique monstrueuse*, L'Harmattan, 2020; Anita Staroń, *Au Carrefour des esthétiques. Rachilde et son écriture romanesque 1880–1913*, Wydawnictwo Uniwersytetu Łódzkieg, Łódź, 2015.

図版①　フェルナン・クノップフ《スフィンクスあるいは接吻》(1896)

像上の怪物は、とりわけ詩的形象として出現し、男性を去勢する魔力をもった女性、ファム・ファタルとして表象されてきた。「理性」や「禁欲」、「明快さ」を旗印とする男性支配的な秩序が、女性になぞらえられた神話的な怪物が備える「本能」や「欲動」、「謎」によって解体されるというドラマは、男性たちを魅惑してきたのであり、その背景には前述したデカダンスの風潮も無視できないだろう。文明の極点にあるという認識下にあって、また進化論的な枠組みやイメージが普及していくにつれて、本能や自然、生への回帰、そして退化＝頽廃のヴィジョンは、とりわけ世紀末におけるオプセッションとして、さまざまな作品に現れ出るようになる。その典型的な例を挙げるなら、フェルナン・クノップフ《スフィンクスあるいは接吻》(1896)(図版①)であり、獅子(ここではチーター)の身体と人間の顔を持ったスフィンクス＝女性は、接吻や愛撫によって男性を誘惑するとともに、自らの問いに答えられなかった者を殺すという、エロスとタナトスを備えたファム・ファタルとなるのである。

一方、こうした神話的形象ではなく、犬や猫といった身近な動物に関して言えば、ボードレールの『悪の華』など、詩の中に猫が登場するのが目立つようになる。その千変万化の鳴き声、さまざまな宝石に例えられる瞳、撫でられる背中、毛皮の香りなど、さまざまな感覚を通じて快楽を与える

存在は、男性ではなく女性にあてがわれてきた。また、作品中の動物表象の楽屋話を示す貴重な資料として、ジョルジュ・ドッコワによる『動物と文学者』というインタヴュー集も興味深い。リリットという猫を飼っていたマラルメや、「実は、私は好きではないのです、猫しか。それも狂おしいほどに」[13] と語るユイスマンスをはじめとして、作品中では見せることの稀な猫への愛が伝わってくるが、この書物のエピグラムに掲げられている、ゾラの言葉は見逃せない。「ああ、動物たち！　地を這うものみな、人間の上で嘆くように鳴くものみな、彼らの生きる物語のなかに、われわれが彼らに共感する、何とも広大な領域が必要なのだ！」[14] この１年後にフィガロ紙に「動物たちへの愛」という論考を発表して、動物愛護協会から表彰される自然主義文学者の姿は、いまだ十分に光をあてられていない側面かもしれない。

ここまで見てきた女性＝動物表象は男性作家・芸術家によるもので、美と恐怖を体現する形象として現れ出て、身近な存在としては「つれなき美女」とも言える猫が特権的な存在として登場してきたが、同時代の女性作家・芸術家において動物表象はどのような展開をたどるのだろうか。世紀転換期のフランス女性作家と動物といえば、シドニー＝ガブリエル・コレットの作品と彼女のパフォーマンスを無視することはできない。ラシルドとも交流があり、書簡を交し合い、『メルキュール・ド・フランス』上でラシルドから書評を受ける立場であったコレットは、『牝猫』（1933）やクロディーヌを主人公とした作品群でたびたび動物を登場させただけでなく、『動物の対話 *Dialogues des bêtes*』（1904）、『動物の平和 *La Paix chez les bêtes*』（1916）で、犬や猫のみならず、さまざまな動物に言葉を語らせている。「猫は賓客であって、玩具ではない」[15] とは、『動物の対話』で雌猫

13）　Georges Docquois. *Bêtes et gens de lettres*, Flammarion, 1895, p. 165.
14）　*Ibid.*, page de titre.

キキに語らせた言葉であるが、人間（「二本足族」）に従属したり教訓を与えたりするような位置を与えず、独立しながらもヒトという動物を横目で見ながら言葉を挟むような、自然な存在として描いている。

こうした動物への親密かつ上下のない態度は、ラシルドと同様にコレットも地方出身者であることも理由として挙げられるだろう（ラシルドはペリゴール地方、コレットはブルゴーニュ地方）。愛玩動物とも異なる家畜や野性の動物が生活の身近にいたことは、妄想にまで至るようなファム・ファタルと動物の重ね合わせとは無縁であったことの背景となっているように思われる。またウィリーとの離婚後、コレットは生計を立てるために猫の扮装をして「恋する牝猫」というパントマイムを演じたこともあったが、動物から客観的な距離をとって他者として認識することが許された男性作家的なスタンスではなく、自ら動物に変身して動物を体現するパフォーマンスをするスタンスが、ここには確認できるのである。

男性作家、そして女性作家の動物表象を概観してきたが、それではラシルドと動物はどのような関係を結び、作品の中で描かれてきたのだろうか[16]。ラシルドことマリー＝マルグリット・エムリーはペリゴール地方に生を享け、少女時代には繁茂する自然と動物たちに囲まれた生活を送ることになる。その一方では生計を立てるために研究所に助手として勤めた際、ネズミを解剖するのに立ち会ったことに衝撃を受け、同時にそこで性被害を受けたことも告白している[17]。こうした挿話も含め、後年の『不安に直面して *Face à la peur*』（1942）という自伝的作品では、捕らわれ

15） コレット『動物の対話／平和』榊原晃三・山崎剛太郎訳、グーテンベルク 21、八頁（kinoppy 版）。

16） ラシルドのジェンダー的観点から見た半生については次も参照。「BL 小説の起源？」、前掲拙論、pp. 53–56。そこでは「1860 年にフランス南東部、ペリゴール地方のクロという町で生まれた」（p. 53）としているが、正しくは、「1860 年にフランス南**西**部、ペリゴール地方の**ル**・クロという町で生まれた」である。この場を借りて訂正させていただきたい。

17） Melanie C. Hawthorne, *Rachilde and French Women's Authorship: From Decadence to Modernism*, University of Nebraska Press, 2001, p. 190.

た動物を逃がしていたことも語られる。苦しみを受ける動物を殊に描く傾向は多くの作品に確認されるが、これはメラニー・C・ホーソンの解釈によるならば、精神分析でいう喪失の瞬間を反復し、いわばリハーサルすることで、その苦しみを緩和しようとしているものと言える[18]。のちに闘牛に対して抗議活動をして逮捕されたり、菜食主義者を宣言したりしたのも、第二次世界大戦中、パリがナチに占領された際も、「養うべき動物たちがいる」と言って脱出しないことを選択したのも、こうした経験によるものであろう[19]。

また、ラシルドは自らが「狼人間 loup-garou」の血筋にあるという考えにも強くとらわれていた。彼女の曾祖父は大聖堂参事会員であったにもかかわらず、フランス革命の際にはギロチンにかけられようとしていた女性と結婚してその地位を放棄したという人物であったようだが、この曾祖父を語る際、彼女はペリゴール地方に伝わる狼人間の伝説を強調する。5代にわたって、司祭の子孫は狼へと変身し、2月2日のキリストの奉献の祝日（蠟燭祝別の日）には、噛みつくものを求めて森を駆け回る、という伝説である。『不安に直面して』では「それを知ったとき、私は狂喜した。ついに動物の種族に仲間入りできたのだ！ j'appartiens enfin à la race animale!」と記しており[20]、このような種を超えた変身へのオプセッションも、『動物女』との関係から見逃すことはできないだろう。

「小さな子どもより猫が好き。猫の方が優しく茶目っ気がある」[21]と15歳のときに手紙に残している少女は、狼男（『仔猫 *Minette*』（1889））、巨

18）*Ibid.*, p. 230.

19）Christopher Robison, *From Romantic Teleology to Decadent Animal Activism : Human-Animal Sympathy in the Nineteenth-Century French Novel*, Dissertation of Doctor of Philosophy in the Department of French Studies at Brown University, 2020, pp. 95–97.

20）*Face à la peur*, pp. 54–55, cité Frappier-Mazur Lucienne. « Rachilde : allégories de la guerre », *Romantisme*, No. 85, 1994, p. 18.

21）Edith Silve, préface à la réédition de *L'Animale*, Mercure de France, 1993, p. 8.

大な犬（『闇の王女 *La Princesse des Ténèbres*』（1896））、雌狼の集団（『雌狼つかい *Le Meneur de louves*』（1905））などをはじめとして、さまざまな動物を作品内に登場させているが、その中心に本稿の分析対象となる『動物女 *L'Animale*』（1893）は位置づけられる。またそれだけではない。アニタ・スタロンが「ヒトと動物の間で――ラシルドの下層の生」で詳述しているように、『井戸の中で、あるいは下層の生 *Dans le puits ou la vie inférieure, 1915-1917*』（1918）や『ラジャック *Les Rageac*』（1921）、そして『不安に直面して』といった自伝的作品、そして彼女が夫・アルフレッド・ヴァレットと創刊した『メルキュール・ド・フランス』で四半世紀のあいだ書き続けた大量の書評にもまた、動物に関する注釈が多く残されており、ラシルドの動物に対する強い関心が生涯にわたって見てとれるのである[22)]。

ここでは、『獣たちの劇 *Le Théâtre des bêtes*』（1926）に注目したい。「私はしばしばこの犬で…、あるいはこの猫で…、あるいはこの狼で…」と語られる、子ども向けの 19 本の動物物語を集めた本で、動物画で有名なロジェ・ルブーサンの挿絵も入った形で出版されたものである。この本の序文で、ラシルドは端的に次のように語っている。

> 私が人類に属しているとは思ってもみないこと。むしろ動物という種にこそ近いのだ。［……］文学の女という上着は着ているけど、その下は心理的には、何もかも脱ぎ去った裸の状態だ。人間たちはよってたかって私を飼いならそうとする。私こそ、人間たちを飼いならそうとしてきたのだが。その結果は誤解の連続で、今なおそれは続いている！　おそらく、私は言葉を記したり、唾棄すべき小説の技法を用い

22）　Staroń, « Entre l'humain et l'animal. La vie inférieure de Rachilde », *Rachilde ou les aléas de la postérité, op. cit.*, p. 203.

て自分の想いを伝えるよりも、ミャーと言ったり、吠えたり、鳴きわめく方が良かったのだ。[23)]

ここで特徴的なのは第一に、人間よりも動物に属しているという自認であり、女性を動物扱いすることは自分にとってはむしろ望ましいという考えである。「文学の女 femmes de lettres」は、自身が「ラシルド、文士 homme de lettres」と、「男 homme」を喚起する言葉で署名していたという挿話の逆を指している。つまり、社会は自分を女性作家としてのみ見るけれども、それは真実の姿ではなく、実際は裸のままの獣であり、そうでなければ性を超越した「文士＝文学の男 homme de lettres」であるのだ[24)]。社会はラシルドを女性作家の名にふさわしい存在として「飼いならそう apprivoiser」とするけれども、私こそ文学によって新たな倫理――反人間中心主義的倫理――を社会に示し、あなた方が使った言葉を使うなら、あなた方を「飼いならそう」としてきたのである。第二に、その「飼いならし」のツールとして、小説の技法があまり有効でないと宣言されていることである。技巧的に並べられた言葉よりも、動物が鳴くような声こそがふさわしいのであり、この引用の後では、言葉が意味する内容が重要なのではなく、声、そしてその声が立てる「音 son」や「ノイズ bruit」に私は魅惑されると続けている。

したがって、ラシルドの動物愛はその裏面に人間嫌い的な側面が隠され

23）Rachilde, *Le Théâtre des bêtes*, Les Arts et le Livre, 1926, p. 2.

24）『アドニス夫人』（1888）の序文も参照。「大変遺憾だが、私は文学界の犬 chien de lettres、文壇のヒステリー hystérique de lettres ということらしい。かくも過分な栄光にも、はたまたこのような下劣さにも値しないと思うなら（どちらも予想ができることだ）、私は文学のアンドロギュノス androgyne de lettres になろう。」Rachilde, préface à *Madame Adonis*, Monnier, 1888, p. XI-XII. 両性具有者を一般的に示す「アンドロギュノス」という語は、ここでは人間と動物（犬）のハイブリッドを示唆しているように見える。また、自らに対する中傷（「犬」、「ヒステリー」）に対して否定によって異議申し立てをするのではなく、非難に使われた語の価値を転換させてそのまま返すという方法は、後年のジャン・ジュネや「クィアー」の戦略と類似している。

ており、女性としてのアイデンティを強く主張するのとは正反対に、女性という束縛を脱して動物や男性（あるいは性を超えた「人間」）へと変化することを望むのである。後者は 1885 年をはじめとして断続的に行われた男装の実践ともかかわるものであり[25]、「なぜ私はフェミニストではないのか」（1928）を執筆した背景にもなっているだろう。

実際、ラシルドの動物表象をジェンダー付置に置きなおしてみれば、登場する動物の多様性や野性的な姿、また生贄として苦悶する姿など、そのオリジナリティは確認できるものの、獣性と結びつけられるのは女性であるという印象は変わらず、男性からの視線を内面化しているかのように見えるほどである[26]。『動物女』では主人公ロールが父の見習いのリュシアンを自殺に追い込むスキャンダルを引き起こし、家から放逐され村の教会で雨露をしのぐこととなるが、そこで彼女はこれまでの半生を次のように総括している。

> 自分がここで経験した虚偽の人生と、彼方の新天地で過ごすだろう情熱の人生との間で踏み迷い、とどまっているのは意味がないわけではない。自分は動物の王、呪われし獣、愛撫を受けた獣、どこにでも横たわり、どうしようもなく醜悪な無秩序さも安住させる巣をつくってしまう獣。私は祈りの上に君臨するのだ、何しろ、無垢なまでに獰猛なのだから――神のように。[27]

後の章で示すように、性的暴行を受けた経験、欲望のままに村の男性たち

25） ラシルドの男装の複雑なジェンダー操作については、拙論を参照。「BL 小説の起源？」前掲論文、pp. 54–55.

26） 『自然を逸した者たち』（1897）では男性登場人物に次のような語らせている。「女性とは、等級の低い意志にすぎない！　間違えようもない。私は神で、女は獣 bête だ。」*Les Hors Nature. Mœurs contemporaines*, Mercure de France, 1897, p. 353.

27） *A*, pp. 117–118.

を誘惑しては彼らを次々に捨て、そしてまたパリで新たな情熱を燃やし生きていくだろう自分を、ロールは「無垢なまでに獰猛な innocemment féroce」「獣 bête」であると認めている。こうした認識は瀆神的な考えと至るが、ここに挙げられた想念の数々は、男性作家・芸術家が中心となって築き上げられたファム・ファタル像と矛盾するものではないだろう。そしてこれはラシルドの他の作品にもたびたび見られる図式となっている[28)]。

それではラシルドは、「女性＝獣」という男性的なステレオタイプに従順なままであると言えるのだろうか。この問題を考えるためには、まずはラシルドが「女性＝獣」というヴィジョンに魅せられ多用しているとしても、その内実として何を見ていたかが問われるだろう。

一例として『動物女』における「猫＝女性」という結びつきを考えたい。実はこの物語では、同時代の他の文学・芸術作品とは異なり、中心となって登場する猫は雄猫となっている。もちろん、ロールはこの雄猫リオンと恋愛をし、自らも猫と化していくという筋書きであるから、この「猫＝男性」という設定によって「猫＝女性」という通念を覆しているという単純な結論にはならないだろう。他方で、この物語の結末は「リオン＝男性」がもたらす暴力によって血塗られたものとなり、ロールの動物への「変身」も暴力的な形で成就する。したがって、『動物女』は動物性を純朴なものとしてだけでなく秩序侵犯的なものとしても称揚している物語であると言えても、ラシルドがそれを女性の性質に当てはめようとしているという解釈もまた、無理のあるものと言えよう。人間によって苦しみに打ちひ

28）『ノノ *Nono*』（1885）を動物性の観点から分析したアリエル・ヴェルデランの評言を参照。「イヴの末裔であり、生まれもって罪を背負うとされた女性は、神話が築いてきた伝統と男性による妄想的な投影が交差するなかで、最も原初的な本能に還元された誘惑者以外の何ものでもない。このことと動物性は分離することができないのである」Arielle Verdelhan « L'animal et l'animalité dans *Nono* (1885), avatars de la vérité », *Rachilde ou les aléas de la postérité, op. cit.*, p. 189.

しがれる動物を見てきたラシルドはまた、荒々しい自然の中で生存競争をし、ときには人間界に危害を及ぼす動物たちの生々しい様子も熟知していた。動物はしたがって、女性／男性という二分法によって区分けされるものではない。これがラシルドにおける男性／女性／動物という3つの世界の関係性の複雑さ――ときには女性作家ラシルドは「男性＝動物」にあこがれ、ときには「女性＝動物」の価値観を擁護する――の原因なのではないだろうか。

この章では「女性＝動物」という紋切り型が世紀転換期に強くはびこっていたのを確認した後、女性作家の動物表象、そしてラシルドの動物観をその生涯とともに見てきた。一方で、ラシルドは時代のジェンダー・ステレオタイプを利用していることが確認されたが、それは世紀末フランスという男性支配が色濃かった文学界に、女性作家が参入するための通行手形であったという側面も無視できないだろうし、「動物＝獣」にあるネガティブな含意を積極的なもの――反人間中心主義による体制侵犯――に価値転換させる意味合いも含まれていたであろう。他方、ラシルドが動物の多様な面を無視せず、暴力的な面もまた見逃すことがなかった点は、現代の動物愛護運動やそのバックボーンとなる思想を吟味するうえでも重要である。次章では『動物女』の筋を追いながら、こうした複雑かつ複数の動物性 animalités が、女性主人公ロールの造形にあたってどのように含みこまれているかを、心やジェンダーの観点を中心に考察したい。

2.「動物＝女」のアイデンティティ

『動物女』は、『世紀末』という雑誌に *Bestialités* というタイトルで1891年10月から1892年4月まで連載された。Bestialités という語は「獣性」とも、精神医学の文脈では「獣姦」とも訳せるが、複数形で示さ

れる場合には数々の実際の行為を示唆することを考えれば、後者の意味合いが強いだろう[29]。差し止め、検閲を受けた『ヴィーナス氏』など、性のありかたをめぐる社会的通念を逸脱してきたラシルドのこれまでの活動、また彼女の人目を惹くタイトルの付け方を考えるならば、同時代の読者はセンセーショナルな作品としてとらえたように思われる。連載初回に付された挿絵は、屋根の上で上半身もあらわに横臥している女性の乱れた髪を、猫が毛づくろいをするかように触っている情景を描いており（実際には連載された回にこのような場面は語られていない）、女性が猫のしっぽを握る手つきなど性的なほのめかしに溢れた煽情的な挿絵は、この時代の読者の期待の水準を表しているように思われる。

連載前の紹介文を見ると、「これは愛を求める女の物語である。彼女の腹の底は動物たちのそれと通じ合っている。彼女はある種独特な神経症 névrose にかかっており、夜に猫たちと屋根の上を走りまわるよう、かり立てられるのである」[30] とあり、本稿冒頭で見たように女性特有の神経症による症例として読者の注目を引きつけようとしていることが見てとれる。また書籍として出版された後の評判はどのようなものであったか。やはりスキャンダラスな内容であることを前提とした評価が大勢であったが、「純真さも豪放磊落もポエジーも、愛も哲学も宗教も、人間が生み出したこうした物事の何もかも、彼女は見せかけようとしない。彼女はただただ

29）　1905 年に出た獣姦をめぐる研究書では、異類婚姻譚などの神話や実際の歴史だけでなく、文学表象の例としてこの作品が、モンテーニュ『エセー』や男性兵士と雌豹の出会いを描くバルザックの『沙漠の情熱』などとともに、引用・紹介されている。Gaston Dubois-Desaulle, *Étude sur la bestialité au point de vue historique, médical et juridique*, Charles Carrington, 1905, pp. 383–389. また多様な性的倒錯を研究したことで知られる精神科医リヒャルト・フォン・クラフト＝エビングの『性的精神病理』第 9 版（1894）では、「動物性愛 zoophilia」という語が導入されて病理学的に論じられる。濱野ちひろ『聖なるズー』集英社 e 文庫、二〇一九年、四二頁を参照。ラシルドと獣姦というテーマについては次も参照。Simon Porzak, « Perverting Degeneration: Bestiality, Atavism, and Rachilde's" *L'Animale*" », *Nineteenth-Century French Studies*, Vol. 46, No. 1/2（Fall-Winter 2017–2018）, pp. 93–113.

30）　*Fin de siècle*, janvier 1891, cité par Silve, *op. cit.*, p. 11.

倒錯しているのだ」というルイ・デュミュールの書評は興味深い。「豪放磊落」と訳した gauloiserie という語は、ガリア気質とも言うべき陽気で猥雑な性質を指すものだが、伝統的に男性性に付与されてきた気質であり、その点で「人間 homme が生み出したこうした物事」は「男が生み出したこうした物事」とも訳せるところであろう。そしてこの女性作家を「ただただ倒錯している seulement perverse」と断じているが、作中人物であるロール同様、女性に対して神経症や倒錯というレッテルが貼られていることについては注目してよいだろう[31)]。

『動物女』はすでに見たように、愛人アンリが眠る隣で不眠に苛まれる主人公ロールが、屋根の上に登って「神経症的」あるいは夢遊病的にもみえる彷徨をするところから幕を開ける。このような彷徨は、この時代のブルジョワ男性であれば遊歩 flânerie という形で実現できたものであり、他方ブルジョワ女性たちは、とりわけ夜間に自由に外出することはかなわなかった。女性と思いを共有せず眠り込んでいる男性を離れ、猫たち、とりわけリオンと名が付けられる雄猫へと愛が向けられていく象徴的な場面であるが、『動物女』の叙述の形式も重要である。3 人称による叙述が中心の物語であるが、ロールの声や思いは主に自由間接話法を通じて発せられるのであり、男性作家が神経症的女性をいわば診察の対象として、距離を十分にとって客観的な描写をしていくような語りは採用されていない。語り手はロールにときに寄り添い、思いを共有する形で話を進行させていくのである。

またここでロールにあてがわれた神経症について、当時とりわけ女性の

31） 友人である作家ジャン・ロランによる次の評言も参照。「私の知る限り、最も倒錯的で、最も不健康、最も残酷なまでに気の触れた本を読み終えたばかりである…」（Lettre non datée de Lorrain à Rachilde, cité par Porzac, art. cit., p. 96. また、この作品についてではないが、ラシルド本人はこのように不道徳と見られる作品を書いてきたという評判に対して、次のように応答している。「私は物語を書いた――あまり道徳的でない話である。この点で、人生に似ている物語だ」（『アドニス夫人』序文）。

病として喧伝されたヒステリーの観点から見てみよう。冒頭の場面に時間的には先行する場面であるが、不眠と彷徨の主題を先取りするかのように、アンリとの会話でロールは自分が見た悪夢を描き出す。

> 夜に目が覚め、あなたがいないと、自分は大きな森の中にいるかのよう。少女の頃に来たことがある森に。狼たちが吠えるのが聞こえ、あたりは暗く、冬で、私はおなかをすかしている…。震えが止まらず、頭を上げて空を見ようとしてももう無理なの。花を見てもそれが花であることなどもう分からないし、お金を見ても、苔の上で輝く金貨であることが分からない。母に会ってしまったら、彼女を食べてしまいそうよ。ああ、こんな夢をみるくらいなら、眠らない方がましよ。[32]

狼の吠えるのが聞こえる広大な森にさまようという、実際に少女時代にラシルドが体験したことが背景にあるような幻想的な語りであるが、母殺しの妄想は、家族から勘当させられた後、許婚であるアンリを何とかつなぎとめ、愛人に収まるという背景によるものであろう。このような幻想を聞いて、アンリは「ヒステリー少々か Une petite dose d'hystérie」とおどけるが、ロールは「ヒステリーは、あなたが言うように流行の病だけど、自分がかかっているとは思わない。たぶんこの時代に生きる男 hommes たち、あなたみたいな男たち hommes の方が病人よ！」[33] と返しており、ここには妄想をヒステリーという病に還元し、女性であることに起因させる通念への皮肉が見られる。

ここで時間を巻き戻し、少女のころのロールがどのように描かれているかを見てみよう。エステラクという南仏の架空の村で育ったロール・ロル

32）*A*, pp. 139–140.
33）*Ibid.*, p. 140.

デスは、両親から「お行儀良くしなさい」という圧力を絶えず受ける。こうしたしつけへの反発からか、「彼女は一人、だれも見ていないのを見計らってお菓子を食べるのが好きだった。腰かけ椅子の後ろや、中庭の一角に、四つん這いになって忍び込み、食い物にありつく仔犬たちをまねるかのように、おかしをかじり、噛みしめ、においをかぎ、味わうのだった。あたりを目でこっそりと確認し、尾を足で挟んで、邪魔者がやってくるのを警戒するような素振りであった」[34)]。「四つん這いになって」と訳した à quatre pattes は直訳すれば「四つ足」であり、足に挟まれた尾や、触覚（「噛みしめ」）・嗅覚（「においをかぎ」）・味覚（「味わう」）・視覚（「目でこっそりと確認し」）を駆使した表現とともに、将来、彼女が雄猫リオンと生活をする際の身振りが予兆されていると言える。またここには前章で見た、ラシルド一族に伝わる狼人間 loup-garou のモチーフも確認できるだろう。

両親からの文明的な抑圧と、それに呼応する野生＝獣へのあこがれのなかで、ロールは 13 歳のときに、農夫マルクーに性的暴行を受け「恥 honte」の感覚を覚える。このような深い傷は、彼女を産む性としての「母性」の否定へと向かわせると同時に、暴行者としての「男性」全般に対して報復するかのように、男性を誘惑する女性へと変貌させていく。父の見習いで片目の男リュシアン・セシャールや、若い司祭アルマンを誘惑しつつ、両親が望むアンリと婚約を決めるが、ロールに捨てられたリュシアンは井戸に身を投げ、村中に醜聞が広がり、ロールは家族から勘当される…というのが前半の物語となる。誘惑者としてのロールは、次のようにこの 3 人の男への「愛」について自問し、要求の言葉を発している。

彼女は思った、私はアルマンもリュシアンを愛していない、抗しがた

34） *Ibid.*, p. 30.

> い力に導かれて、男たちに対する勝利に向かって突き進んでいるのだ。［……］私には今なお欠けたところがある、心からの喜び…、しかしそもそも私には心があるのか？[35]

> あなたは私を愛することになるでしょう、アンリ、それが私の望みです！　私を愛することを力ずくで命じます。それを守らないのなら、私は動物の中でも最低のものになるでしょう、そう、私のことをもう獣 bête だと思っているでしょうけど。[36]

第一の引用では、「男たちに対する勝利」は「人間たち hommes に対する勝利」とも解釈できるところであり、それはロールがまわりに発散する、文字通りの意味での「非人間性」、すなわち「心 cœur」の欠如によるものである。ここでの「心」は感情を生み出すものというような通俗的な意味で使われていると言えるけれども、「心」こそ、神経の網状組織による外的刺激の受容体として、人間を動物あるいは機械として見る見方によって、この時代に大きく揺り動かされたものである。この引用の後でロールは、心の痙攣を脈拍のように数えるときに、かなり漠然とではあるがこの物体の存在を感じる、と考えるが、こうした生物学的な見方に続くのは、愛せないという不安から「別の感覚、より鋭敏な快楽」「狂熱 rage」をさらに追い求めるという欲求であった。このような「動物的」といってもよい感覚的な快楽の追求のヴィジョンは、『動物女』においては、アルマンとの対話に見られるような宗教への懐疑という観点から展開されている。

他方、第二の引用では、自らを愛することを命じるという、能動的であると同時に受動的でもあるような、捻じ曲がった欲望が喚起されていると

35）*Ibid.*, p. 84.
36）*Ibid.*, p. 100.

ともに、その約束が果たされないならば、ロールの動物性が発露する（あなたではなく動物の方を愛する）という予言めいたセリフとなっている。したがって、二つの引用から見えてくるのは、ロールにおける人間への愛そして「心」に対する疑いであり、こうした人間主義的なヴィジョンにとってかわるのは、神経症あるいは倒錯として扱われるような、動物への愛そして「狂熱 rage」なのである。狂犬病も指す後者の語は、『動物女』の結末を予告するものともなるだろう。

ロールのアイデンティティを動物性やジェンダー、そして人間という主体をつかさどる「心」や「神経」、「感覚」の関係から見てきたが、その特徴は第一に「人間＝男性 hommes」に対する飽くなき闘いであり（世紀転換期に「性の戦争 guerre des sexes」が論じられたことも想起できる[37]）、第二に「心」や「魂」に対する懐疑であった。この章を閉じるにあたって、物語の後半を支配する雄猫リオンとの出会いに注目したい。ロールは先述のスキャンダルにより、両親から放逐され、村を脱出しパリに向かう。パリ到着後、別の女性と結婚をしようとしていたアンリを改めて誘惑し、自ら愛人の立場となって住まいを確保することに成功する。このような生活のなかで、神経症的とされる不安から深夜に屋根の上を彷徨する挿話が、作品の冒頭を飾ったわけだが、ロールは下水口にいた雄猫を見つけ、「小さなエジプトの神」[38] といった風貌から、「リオン（ライオン）」と名付けて部屋に連れてくる。リオンは「すばらしい声でミャーと鳴くが、それは社会を糾弾するかのような呪われた者の声で、社会に最後に一蹴り食らわす前の冒瀆であるかのように聞こえた」[39] のであり、「呪われた」など、

37） 例えば次を参照。Regina Bollhalder Mayer, *Éros décadent. Sexe et identité chez Rachilde*, Champion, 2002, pp. 31–35; Christophe Cima, *Vie et œuvre de Jean Lorrain, ou, Chronique d'une" guerre des sexes" à la Belle Epoque*, Alandis, 2009.
38） *A*, p. 127.
39） *Ibid.*, p. 124.

ロールが自らを称して用いた語（「呪われし獣」）も用いながら、人間の社会を侵犯する声を聞き取るのである。

その後の箇所では、ロールは「自らのうちに格別に備わっている、野蛮な形質があることを発見した。この小さい猫の繊細な本能に相応するかのような、秘められた獣性である」[40] と、リオンの、人間の秩序など無関係に自由気ままに生きる姿は、ロール自身の獣性の再認を導いている。ここで「秘められた獣性 des entrailles de bête」としたのは、直訳するならば「獣の臓物、腹」であり、「心」の底にあるというよりも「腹」の底にある野生こそ、両者が共有し、コミュニケーションの仲立ちとするものとなるものだろう。

次章では、この女性と雄猫のコミュニケーションの様態を見ることで、動物を愛し、動物としてのアイデンティティを徐々に持ちはじめる女性が最終的に成し遂げた「変身」について、その意義を考察したい。

3. 動物愛、ケア、暴力

ロールという女性とリオンという雄猫のあいだには、異性間そして異種間のコミュニケーションが生まれようとしているが[41]、後者は食事の場面でまずは発揮される。前章で見たように、「四つん這いで」忍び込み、仔犬をまねておかしをかじっていた少女は、アンリの愛人となった後も、リオンと差し向かいで、二人（あるいは二匹）で絨毯に置かれた食べ物をむさぼることになる[42]。「母を求めて泣くことも、過ちを悔いて泣くこと

40）*Ibid.*, p. 132.
41）サイモン・ボアザックによれば、ロールは男性に対しては自分を獣、動物に対しては自分を女性として、「猫という種とヒトという種の媒介」として自己定義している。Porzak, “Perverting Degeneration, art. cit., p. 105.
42）*A*, p. 152.

もない、時計も他人の意見も気にすることもなく、撫でられることを求めて夜にさまよい、食べて飲んで、昼日中は寝ていられる獣たちの平穏さ！」[43] と、猫がもつ独立性や、母といった係累など「気に病むことのない」性質[44] に感嘆するロール。「狼の毛皮をまといたい……」とまで言うロールとリオンは、種の違いを乗り超えて徐々に接近していく。

> この小さな猫は、愛情をかける人間にすり寄って子どものような振る舞いをすることで、人間になるかのようであった。一方、猫の毛を獣のようになでるこの女の方が、猫に変身するかのようである。爪を立て、自らの苦しみを、情熱と苦悶がこもった鳴き声に込めて、声を上げずにはいられないのである。[45]

人間 humain になろうとする猫と、猫 féline に変身するかのような女性――、「人間＝男」を一貫して拒絶する態度を見せてきたロール＝ラシルドにとって、猫がなろうとしている人間は自立した存在とされる男でも成人でもなく、「子ども」であるのが特徴的であろう[46]。他方、ロールが猫と共有するのは「受苦＝情熱 passion」というモチーフであり、人間の加虐によって苦悶する獣というラシルドのオプセッションが『動物女』でも透けてみえる。

一方、愛人アンリがロールの部屋を訪れなくなると、ロールは動物では

43） *Ibid.*, p. 141.

44） メラニー・C・ホーソンはその広範なラシルド伝を締めるものとして、「ラシルドは気にしないということの達人である」という言葉から始める最終章を書いている。Hawthorne, *Rachilde and French Women's Authorship*, *op. cit.*, pp. 228–234.

45） *A*, 175.

46） 西洋において動物が人間へと変わるという変身譚は、人間が動物へ変身する物語と比べて稀であると言われるが、フランス文学史上で有名な話は、ラ・フォンテーヌの寓話「女に姿を変えた雌猫」だろう。しかしこの「女」は妻として期待されたが、ネズミを捕るのに忙しく夫は失望をしてしまうという、人生に対する教訓を読み込める話となっている。

なく植物に移行したかのようになる。

> おかしなことだが、ロールはうんざりするという意識もなかったのである。彼女は動物としての生活も営むことがなくなった。彼女は植物の生を、かろうじて生き永らえる生を過ごすばかりだった。愛が粉々に砕け散ったことで脳は急速に縮み上がり、衝撃は彼女から思考を奪った。夢見ることもなければ、欲望を抱くこともなく、腕で自分の体を抱き丸くなって、午後いっぱい眠り込んでは夕暮れに目を覚ますのだった。[47]

「心」から「神経」へのパラダイムの移行を考える上で、ロールが「生き永らえる生を過ごす végétait」「植物の生 une vie de plante」は、神経過敏の真逆の状態として注目すべき描写である。これまでロールは欲望に苛まれ、外部からやってくるさまざまな感覚に突き動かされる、作品中の言葉を使えば「獣 bête」の生を生きてきたわけだが、うつ状態に陥った彼女は今や、悲しむことも欲望を抱くこともなく無感覚となり、また神経を伝って感覚を受容し統御する脳もまた、感覚が枯れ果てた結果、退化していったのである。動物への変容のみならず、神経系を欠いた植物への移行についての文学的想像もまた、人間外の様態を垣間見させるものとして、ポストヒューマン的な文脈においても貴重な表象であろう[48]。

47）*A*, 152.

48）『動物女』において見逃せないもう一つの植物の表象は、ロールの実家の庭に大量に植えられた、アンゼリカというセリ科の植物である。原語の angélique はもう一つの意味としてフランス語で「天使のような」という意味を持つように、宗教的な含意もありながら毒をもつことでも知られており、ファム・ファタルの両義性をも喚起するものとなっている。Diana Holmes, *Rachilde. Decadence, Gender and the Woman writer*, Berg, 2001, p. 134; Morgane Leray, «Rachilde, animale des lettres. Pour une lecture écoféministe de l'œuvre rachildienne», *Rachilde ou les aléas de la postérité*, *op. cit.*, pp. 99–100; Claire Nettleton, *The Artist as Animal in Nineteenth-Century French Literature*, Palgrave Studies in Animals and Literature, Palgrave Macmillan, 2019, p. 261.

さて、こうした無気力な状態に陥ったロールに対して、雄猫リオンはどのような作用を及ぼすのだろうか。

> 猫は立ち上がり、ロールの肩に前足を置いて、とても繊細に頬に流れる涙をなめた。彼女はひどく驚いたが、それはこの、胸を引き裂かれそうな苦しみが安らいだからであり、自然の秩序を揺り動かすことだったからである。子どもの知性が花開くのを見て喜ぶことができた母親のように、ロールは歓喜し、女性たちの中でも特権を得た者であると感じた。彼女はつましい者たちに対する感情の激発のなかで、ありとあらゆる悲しみから解放され、この猫が自分に話しかけてくれたことに感謝したのである。[49)]

「癒し」や「慰め」という一言で解釈されかねない描写であるが、表現に注意しながら見ていくと、まず涙をなめてもらったことによるロールの驚きは、「自然の秩序を揺り動かす bouleversent l'ordre établi dans la nature ことだったから」とされており、リオンの行為は、ヒトとヒト以外の動物を厳然と区別する、自然界に置かれた階層秩序を超えた行為とみなされている。また先にリオンが人間化する際に「子ども」の比喩が用いられていたが、ここでもそのイメージは継続している。そしてそれは、しつけに厳しい両親を嫌がり、母性を疑う存在であったロールにとって、失われた母親像を取り戻す機会であったと言えよう。

最後に、ロールにとってリオンは「子ども」であると同時に「つましい者たち les humbles」である。のちの場面にある、「猫はよくベッドの上に飛びかかり、唇に近づき、髭で繊細に触れてきた。ついには彼女の上でうずくまるが、大人になった猫であれば体重も重いところ、不思議なくら

49) *A*, pp. 170-171（ラシルド強調）.

いの軽さで、ロールをその小さな、引き締まった獣の体で覆うのであった。彼女を救うことができないからこそ、そのなめらかな毛並みをした足で抱きしめ、愛しんでくれたのだ」という記述を見る限り、このような小さき者だからこそできるケアがあると言えよう。人間と同じ言葉を使うことができなくても、そして現実の世界では効力を持たない行為にすぎなくても、ロールにとっては自分に「話しかけてくれた *avoir parlé*」のであり、獣の体で覆って「抱きしめ」てくれたのだ。ロールによる独りよがりの、擬人法的な解釈と言われかねない想像ではありつつも、リオンと共通の地平をつくるものとして重要な想念と言えよう[50]。

一方でこのリオンの行為は性愛的な面にも及ぶものである（「唇に近づき、髭で繊細に触れてきた s'approchait de ses lèvres, les effleurait délicatement de ses moustaches」「（彼女を）愛しんでくれた l'adorant」）。スキンシップをケアかセクシャルな行為か、明確に区別することが難しいように、両者の関係性にも、徐々に性愛的な意味での欲望が介在しはじめる。アンリから関係を断たれ生計を立てられない状況となったロールは、リオンだけを見つめる生活を続ける。

> この暗い冬の間、猫とずっと差し向かいでいるうちに、彼女は今まで味わったことのない熱情を発見した。リオンは私のことが好きなのだ、と。でもそれはたいして驚くことではないはずで、私の神経症はどんなおかしな状況にも慣れてきたのだから。私に対するこの獣の愛というのは疑いないようなことで、もっと早く気が付いて心動かされるべきことだったのに。かわいいあの子は嫉妬に苦しんだに違いない。［……］猫は私にたいへん雄弁な言葉で話しかけてきたのだ、目によ

50）　別の箇所では、リオンがもたらしてくれるものは「魔法」とされ、ロールは「素直に操られるばかりで、リオンが愛撫で与えたものを知性においては見失って満足する」（p. 213）と、知性では解明不可能なものとして位置づけられている。

って。[51]

動物の人間への愛、さらにはそれへの応答という形での動物性愛 zoophilia ともとらえられる記述である。先の引用にあったロールの母性愛的優しさや、リオンによる慰めが出発点としてありながらも、熱情や嫉妬をもたらすところにまで行き着く、いわば相手を独占するような愛の形が提示されているが、リオンの「嫉妬」は物語の結末で前景化するものとなるだろう。

先述したように、動物愛という現象は同時代において性的倒錯として病理化された形で概念化されるようになっており、『動物女』については雑誌連載時のタイトルが『獣姦』であったことに象徴的なように、性的な解釈で読み取られる傾向があった。一方で、ロールがリオンに向ける愛は人間としての愛というよりはむしろ、ロール自身がリオンへ近づいていき、理想的には異種間ではなく同種間で恋愛を行っていると言える。そしてこれを成立させるのは、人間としてではなく、「二つの純然たる生き物 créatures」の間で、「同じ倦怠、同じ焦燥、同じ喜び」[52] を感じるという共有の枠組みである。さらに言えば、目による訴えこそ、両者の共通言語なのである。したがって、ここで問われているのは動物愛よりむしろ、ロールが猫になったうえでの「生き物」どうしの恋愛と言えるのである。

両者の結合あるいはロールの獣への変容は、思いもよらぬ形で実現し、物語は閉じられる。アンリから捨てられたロールは生きるために売春をすることを決意するが、初めてとった客との売春に踏み切れず、男が差し出した紙幣を燃やす。しかしそこから急転直下、その男と恋に落ち、自らのルーツを取り戻したかのように「快楽こそ、私の宗教！」と叫んで、とも

51） *Ibid.*, pp. 209–210.
52） *Ibid.*, pp. 210.

にアフリカに旅立とうとする。アフリカは当時のヨーロッパでは、獣性を想起させる地域であったことは言うまでもない。失踪していたリオンは、男が迎えに来てくれるのを待つロールのもとに帰るが、自分のもとを去ろうとする彼女に対し激しい嫉妬にかられ、文中に繰り返される言葉を使えば「狂熱 rage」が猛り狂った様子である。「リオンはまさに復讐をしようという気配を漂わせていた。美しいものはすべて、優美なものも甘美なものもすべて、歯牙にかけようとしていた。眼を刳り貫いてしまいたい、あのエジプト女の眼を、あの涙をためて、死という想念で曇らされた眼を」[53]。ロールを指す「あのエジプト女 Égyptienne」は、リオンを捨て新天地アフリカを目指そうとすることを示唆するだけでなく、スフィンクスすなわち雌獅子 lionne（リオンヌ）をも喚起するものだろう。いわば、リオンの眼にはロールはすでに、自分と同類の猫的な生き物へと変わりつつあるのである。

そしてついにリオンはロールを襲うのだが、断末魔のロールの視覚に入った「怪物」とはいったい何者なのだろうか。

> 彼女の面前で、悪魔のような猫がとびかかってくる瞬間を見た。未知の怪物であり、恐ろしい怪物……。その獣の鼻口部は歯のところまでかじられ、鼻先は切られており、低くつぶれ、二つの楕円の黒々とした穴を見せるのみとなっている。まぶたはなく、ルビー色の瞳をしており、垂れ下がった乳房は裂けている。ひれがついたように刻まれ横に広がった足は赤く染まり、素晴らしい獣毛の下にある背骨は垂直に伸びて、茶色の毛皮もまた長く伸び、ビロードのようになめらかな、カールした黄色い尾が終端部となっていた。
>
> 血染めのヴェールを通して、ロールが見たのは鏡の中の自分であっ

53）*Ibid.*, p. 239.

た。[54]

陰惨極まりない情景であるが、この「怪物」は雄猫リオンかと思いきや「鏡の中の自分」、ロールなのである。描写では顔の一部を噛み切られ、引き裂かれた体は乳房から足までたどられるが、「素晴らしい獣毛」「茶色の毛皮」そしてついには「ビロードのようになめらかな、カールした黄色い尾」が現れ出るのであり、リオンの襲撃によってロールは獣へと変身を遂げるのである。動物による慰めやケアといった印象的な場面をここまで描きながらも、ラシルドは『動物女』の結びとして、命取りの獣という主題を導入し、暴力によって人間と動物は一体となるというヴィジョンを提示しているのである。これは動物物語にしばしば見られる異なる種どうしの牧歌的な融和とは、まったくかけ離れたものであろう。

しかし、これで終わりではない。「獣へと変身した女 la femme métamorphosée en bête は、そのまま這いつくばって屋根の開口部を抜け」リオンから逃れようとするが、「彼女のうなじにはなおも凶暴な雄 mâle féroce がしがみついていた」[55]。屋根の上への脱出は、物語冒頭における神経症的不眠に苛まれたロールが寝室を脱け出し、猫たちのダンスを目撃した解放の場面の反復であり、ともに動物との一体化を示す挿話であるが、その意味は大きく異なる。ロールは彼女にしがみつく――抱きしめようとする――リオンものとも、屋根から墜落するのである。かつて、路上、下水口の近くにいた猫リオンは、人間の住むアパルトマンの下層に位置していたが、ロールは屋根の上にのぼることで猫たちのダンスに出会う。リオンとの同居生活は、人間的な秩序を気にかけず欲望に生きる人生であったが、その果てに、ロールは屋根の上に登りながらも放物線を描いて墜落し、

54） *Ibid.*, p. 241.
55） *Ibid.*, pp. 240–241.

リオンが元いた世界に舞い戻る。動物と人間をめぐる存在の大いなる連鎖ともいうべき、動物の世界（下層）―人間の世界（中層）―神・天使の世界（上層）という三つの世界を、リオンに誘われ行き来したのが『動物女』という物語であると、この衝撃的な結びの場面から読み取れるであろう。ラシルドの世界観では、下層（下水口）にいると思われた動物は、実際は上層（屋根の上）にいて、人間＝男たちを見下ろしているのである[56]。

本章ではロールと雄猫リオンの関係性について、動物愛やケア、そして暴力との関係から考察してきた。ロールのリオンへの愛は、性愛と重なるところはあっても、人間として動物を愛するというよりも、自ら動物に変身して同じ種として動物を愛するという構造をとっている。人間界での悲しみに打ちひしがれたロールをリオンは涙をなめたり、言葉なきスキンシップによって慰めようとするが、このような卑小な存在によるケアの価値をラシルドは提示しているのと同時に、その裏側にある暴力の存在も見逃してはいない。暴行による両者の一体化の完遂は、作品内のジェンダー付置（女性ロールと雄猫リオン）とも連動して、男性の暴力という問題もまた導く結末と言えるだろう。

結びにかえて

本稿ではラシルドの『動物女』を神経症的描写の分析からはじめて、それがジェンダーそして動物性との関わりからどのように展開されてきたかについて論じてきた。美と恐怖そして獣性を備えたファム・ファタル像を生み出してきた当時の男性作家・芸術家に対して、ラシルドは『動物女』

56）　南仏エストラクで少女時代に出くわした男たちを想起して、ロールはこのように人間と動物の位階秩序を逆転させている。「いいえ、あの男たちは獣たちと同じように愛する才能などないのよ。生物の階層で彼らは動物の下にいる、ダイヤモンドや貝殻などの鉱物と一緒！」*Ibid.*, p. 150.

において、そうした表象の枠組みに沿いながらジェンダー付置を行っているように見える。ロールという欲望のままに生きた特異な女性像は、倒錯 perversion や神経症的病理と解釈される余地を残している。しかし、動物をモデルとして外界から受ける刺激に純粋に従い、男性たちが打ち立てた秩序（性愛・宗教・結婚）を侵犯していくという筋書きは、神経回路を通じた主体の変容という論理を極限までつきつめていくプロセスであったと言えるだろう（第１章）。

他方、ロールにとって最も重要な出会いは雄猫リオンとの出会いであり、「彼」との身体的な触れ合いは、触覚・嗅覚・味覚表現といったマイナーとされる感覚を通じて表現され、卑小なものこそがもたらしてくれる理想の性愛を映し出している。一方でこの性愛の様態はケアとは区分しがたいスキンシップであり、同時代に病理化される動物性愛 zoophilia とは一線を画すものとなる。ロールは人間として動物を愛するのではなく、動物に変身して動物を愛するのである。他方、衝撃的な結末に見られるように、このようなヒトと動物の間の恋愛にも暴力の影が潜んでおり、嫉妬という「狂熱 rage」に支配された雄猫という設定は、動物愛にも潜むジェンダー構造を浮かびあがらせていると言える。女性の神経症的な不眠と屋根の上の彷徨から始まる『動物女』は、「心」なき少女の遍歴を描いた後、「男性」であるリオンの狂気によって幕を閉じるのである（第２・３章）。

女性作家が描く動物小説として『動物女』には、男性作家がとりがちな観察者という立場ではなく、動物に直接触れ、さらには動物に「なる」立場が色濃く映し出されていた。その点で、自由間接話法の多用もあいまって、主人公ロールは話者さらにはラシルドと区別されがたい存在であったと言える。他方、『動物女』をはじめとするラシルドの世紀転換期の作品群は、デカダンスやレアリスム、幻想文学という時代の要請に十分に応えた、技巧的、そしてある種通俗的な面も見せている。結末近く、売春の客

として出会った男と恋に落ちるという展開はそれを示すものと言えるが、この男は次のようにさらりとロールに告げている。

> 僕はついに魅力的な女性を代表するような、美しく知的な獣 la belle bête intelligente を見つけたよ。人間がしつけとして教わってきた細々したことなどうんざりだ。君を世界から連れ出してやる。[57]

ただ美しいだけでも純朴でもない、自らが生きる社会に男性＝人間の支配を見てとり爪を立てる「獣」こそ、ロール＝ラシルドという存在であり、この『動物愛』という作品そのものなのではないかという仮説を提示して、筆をおきたい[58]。

57）　*Ibid.*, p. 234.

58）　本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「心の終焉―神経表象と 19 世紀末フランス」による研究成果の一部である。また本稿を記すうえで、「独身者文学と「逸脱」の美学―象徴主義とジェンダー」（「現代の起点」としてのフランス象徴主義の総合的研究 基盤研究（B）、2022 年 7 月 23 日）、「倒錯 perversion か侵犯 subversion か？―フランス世紀末女性作家ラシルドと動物愛」（〈身体〉とジェンダー研究会（神奈川大学）、2023 年 3 月 23 日）の発表をそれぞれ、きっかけ、題材とした。両研究会では貴重なコメントをたくさんいただいた。ここにお礼申し上げたい。